

## 長屋と人々の暮らし⑥

## 長屋で暮らす人びと

江東区深川江戸資料館

江戸の町の発展とともに増加した長屋住まいの人びとの生活振りは、現在でも時代劇や時代小説、江戸時代から続く歌舞伎や落語でも多く取り上げられています。本号では、町の発展に深く関わる、長屋で暮らす人びとの生活についてみていきます。

## 1. 江戸の町の発展と長屋

江戸の町は、天正18年(1590)、徳川家康の江戸入府後より開発・整備が進められ、その人口は慶長末年(1610年頃)には約15万人程度と記録されていますが、17世紀後半には町人人口が約35万人、のちに享保期(1716～1736)には、約50万人へと増加します。幕末の頃になると、武家地と寺社地等を除いた町人地は江戸全体の約16パーセントで、最大60万人弱の人たちが生活していたといえます。

文政11年(1828)の記録によれば、江戸の平均的な店借率(長屋住まいの借家人)は、約70パーセントに達していました。とりわけ、深川地域は82.5パーセントを占めており、江戸市中で最も高い割合でした。

当該地域には、常設展示室のモデルとなった深川佐賀町があります。当時の深川佐賀町の概況は、町内の惣家数が312軒で、その内、店借が249人でした。こうした人びとの生業は棒手振と呼ばれる小商人や、小職人であり、決して裕福な暮らしではありませんでした(資料館ノート第113号参照)。しかしながら、都市生活を支えたこれらの職業を生業とした深川の長屋に暮らした人びとは、江戸市中の発展に欠かすことのできない存在であったといえます。

## 2. 庶民の暮らし

## (1) 生活の道具

長屋で暮らす人びとが日常で使っていた道具の中でも、台所には火をおこすための道具が必需品であり、居間や夜道には照明が必要です。図1には、江戸の庶民が使った生活道具がひとつひとつ分かりやすく描かれています。その中には、ひしゃくや提灯、はたき



【図1】芳虎「新板かつて道具尽」  
安政4年(1857) 国立国会図書館蔵

やシュロのほうき等があります。長屋で生活する中で、このうちどれだけが揃っていたかは不明ですが、四畳半という狭い生活スペースをいかに有効活用するかが住みやすさを左右していたので、多くの物を置くことはしなかったようです。これらの生活道具は、現在でも使うことがある馴染み深い道具もあります。近代になっても大きな生活環境の変化がなかったため、生活様式も大きく変化することがありませんでした。

また、電気がなかった江戸時代は、夜になると辺りは真っ暗になり明が必要になります。そこで、人びとは照明具として主に行灯を用いていました。

行灯は、油を入れた小皿に灯芯を浸して火をつけ、回りを和紙で囲んだものです。その油には、主にイワシやニシン等から抽出された魚油が使われました。魚油は燃やすと悪臭を放つため、長時間使うことは

